

高松市美術館の活動の特色とアートプロジェクト

Writer

宇川 亜澄 UKAWA Asumi

筑波大学芸術専門学群
芸術学専攻芸術支援コース4年

近年、「横浜トリエンナーレ」、「大地の芸術祭」など、土地とその特色を生かした芸術祭・国際芸術祭等の大規模なアートプロジェクトが注目を浴びており、街の活性化、地域振興など、アート以外の場面でも大きく期待されている。そして、注目を集めた大規模アートプロジェクトの一つとして「瀬戸内国際芸術祭」が挙げられる。2010年に開催されたこの国際芸術祭は大変大きな話題を呼び、全国・国外から約94万人が来場した。ベネッセアートサイトを手がける直島福武美術財団が牽引し、官民が協力して作り上げたこの芸術祭に、地域の美術館も参加した。中でも高松市美術館は高松市街の立地とコレクション内容を生かし、芸術祭に積極的に協力している。ただ、芸術祭の開催や各組織の協力に至るまでには様々な事柄が絡み合っており、各事柄の今後の発展についても多くの可能性が秘められている。そのような背景を踏まえ、高松市美術館の活動が芸術祭をきっかけにどのように発展していくか、どのような特色を打ち立てていけばよいのかを、本研究で考察する。

第1章では、本研究の主役である高松市美術館の歴史とその性格についてまとめ、基本的な状況を整理した。地方の代表的な美術館としての高松市美術館が、今後どのように発展をすべきか考えるにあたって、「過去」について掘り下げることで、その価値や課題を発見し、次の時代へと視点を移す。

第2章では瀬戸内国際芸術祭と高松市

美術館の関連、美術館の新たな活動について取り上げた。瀬戸内国際芸術祭以降、県民・市民の芸術への興味関心が高まっていると見る。そこで、瀬戸内国際芸術祭の概要と県・市・美術館での関連企画を整理し、芸術祭の規模の大きさを改めて見直した。また、自治体が条例や方針を策定しているなど、香川県・高松市の文化面には非常に大きな影響があった。高松市美術館の活動においても、新たな運営方針が協議される2008年頃から新規企画が見られるようになった。そのひとつである「高松コンテンポラリーアート・アニュアル」は毎年開催の現代アート展であり、高松市美術館の若手学芸員が作家を選出、展示まで手掛けている。今後も続けていくと明言されており、作家・学芸員の育成という側面も持っていることからこの展示を次に繋がる活動として重点的に取り上げる。

これらの「現在」進行している活動や変わりつつある現状を受けて、第3章では高松市美術館の「未来」について考えた。高松市美術館は都市型美術館というその特性から高松市の都市開発における文化面を担っているという側面があり、今一度その意義や目的・役割を整理し、また、高松市美術館に対する現段階での評価もまとめた。そして、これまでの情報から浮かび上がる高松市美術館の課題を踏まえ、未来に向けての方針を考えていく。

幅広い情報を整理すると、「瀬戸内国際芸術祭」という大規模アートプロジェクトの発足以降、高松市美術館主催の「高

松コンテンポラリーアート・アニュアル」、美術館が隣接する丸亀町商店街の「丸亀町アートプロジェクト」、他県内多数のアートプロジェクトの発足が確認できることから、美術館含め、芸術祭の存在は現実 zu 大きく影響があったと判断できる。この状況を背景に、高松市美術館の今後の活動の軸として、本研究では「地域性」、「国際性」、「現代性」を挙げた。芸術祭が今後も開催を予定している以上、それとはまた別の、高松市美術館独自の魅力を生み出さねばならない。現在もその姿勢は随所に見られるが、その中心である「高松コンテンポラリーアート・アニュアル」はまだ開催回数が少なく、今後回数を重ねるにつれてどのように発展するか注目すべきだろう。芸術祭や地域のアートプロジェクトと良好な関係を形成し、芸術祭の影響から一歩抜けた特色を形成することこそが、現在の高松市美術館の課題であると考えた。



高松市美術館の外観（筆者撮影）

1980年代後半のバブル経済期を中心とした日本の美術市場

Writer

金沢 みなみ KANESAWA Minami

筑波大学芸術専門学群
芸術学専攻芸術支援コース4年

1980年代後半、日本はバブルの真っ只中にあった。NTT 株式売却、三菱地所によるロックフェラー・ビルディングの買収(8億4600万ドル＝約1200億円!)、ポディコン・ファッションの女たちが夜な夜な踊るジュリアナ東京・・・いま考えると目も眩むような時代である。

日本全体がバブルに沸いていたが、それは美術市場も例外ではなかった。1987年3月30日に安田火災海上保険(当時)がクリスティーズ・ロンドンでゴッホ《ひまわり》を2250万ポンド(約53億5725万円)で落札したのを皮切りに、日本人はサザビーズやクリスティーズなどといったオークションで、印象派やエコール・ド・パリ、ゴッホ、ピカソなどの絵画を買い漁った。その最たるものが、当時大昭和製紙の名誉会長であった斉藤了英によるゴッホ《医師ガシェの肖像》の落札である。《医師ガシェの肖像》は1990年5月15日のクリスティーズ・ニューヨークに出品されたが、落札価格はなんと7500万ドル(約114億6000万円)という驚くべきものであった。また斉藤はその二日後のサザビーズ・ニューヨークでもルノワール《ムーラン・ド・ラ・ギャレット》を7100万ドル(約108億8430万円)で落札した。手数料を加えると二点の総額はおよそ250億円となり、この二点はそれまでオークションで落札されたもののうちでもっとも高額な絵画となった。

1990年、日本は約五千億円もの絵画を輸入するに至ったが、しかしこれらの

絵画の多くは、芸術的価値よりもむしろ金銭的価値のために買われたものであった。当時、絵画は、債権や不動産に次ぐ魅力的な投資対象と考えられていたのである。またバブル期のこうした美術ブームに便乗して、それまで美術と関わりのなかった企業が新しいビジネスを開拓し、絵画を担保に金を借りることができる「絵画担保ローン」が人気を博すなどした。市場の規模は急速に拡大したが、それにとまって贋作や盗難美術品が氾濫したり、美術品の価格があまりに高騰したために美術館が作品を買えなくなるなどといった問題も発生した。

しかし、バブルはいつまでも続かなかった。1990年10月に日経平均株価が3年7か月ぶりに2万円台を割ると、バブルの崩壊は決定的なものとなった。企業が経営悪化や倒産に陥り、資産価格の下落によって、大量の不良債権が金融機関に溜まってしまったが、そのなかにはおよそ一万点、一兆円にのぼる絵画類が含まれていた。これらの絵画は長く金融機関の倉庫にしまいこまれたが、1990年代半ばあたりから、そのほとんどが徐々に海外へ流出、あるいは運が良ければ美術館へ収蔵された。

バブルの崩壊はその後の日本経済にあまりにも深刻かつ長期的な影響を及ぼし、「失われた10年」はいつのまにか「失われた20年」となった。日本経済におけるバブルの影響は概して否定的に述べられることが多いが、美術市場についてはどうだろうか。空前絶後の美術ブームと

多くの名画を日本にもたらしたのは、まさにバブルではなかったか(ゴッホ《ひまわり》は現在も損保ジャパン東郷青児美術館に展示されている)。

美術市場は、金融市場などと比べればまるで小規模な市場にすぎない。しかし他の市場と同様、経済全体の動向と密接な関係にあることはいうまでもない。現在から振り返って見ると、日本経済のターニング・ポイントはやはりバブルであり、されば、美術市場のターニング・ポイントもまたバブル期にあったと考えられる。美術市場におけるバブルの影響を多面的に捉え、バブル期の美術市場の総体を明らかにすることは、日本の美術市場の過去、現在、そして未来を考える上で決して避けては通れないだろう。